

## 新潟県内における 冠婚葬祭の際に包む金額の相場一覧

株式会社 ホクギン経済研究所調べ  
県内における冠婚葬祭の際に包む金額の相場

### 祝儀金額について

#### <一人で披露宴に出席する場合>

| 対 象      | 全 体    | 20代    | 30代    | 40代    |
|----------|--------|--------|--------|--------|
| 親 族      | 5. 3万円 | 5. 0万円 | 5. 0万円 | 5. 6万円 |
| 友人・知人    | 2. 9万円 | 2. 7万円 | 2. 9万円 | 3. 1万円 |
| 職場関係(上司) | 3. 0万円 | 2. 8万円 | 3. 0万円 | 3. 2万円 |
| 職場関係(同僚) | 2. 9万円 | 2. 9万円 | 3. 0万円 | 3. 1万円 |

#### <夫婦で披露宴に出席する場合>

| 対 象 | 全 体    | 20代    | 30代    | 40代    |
|-----|--------|--------|--------|--------|
| 親 族 | 8. 5万円 | 7. 7万円 | 8. 3万円 | 9. 1万円 |

#### <披露宴に出席しない場合>

| 対 象  | 友 人    | 上 司    | 同 僚    | 御近所    |
|------|--------|--------|--------|--------|
| 全体平均 | 1. 2万円 | 1. 2万円 | 1. 1万円 | 0. 9万円 |

～全て平均金額です～



山 崎 勲 君

\* 鶴巻三郎鶴米会の宮原様、川口様が来会され鶴巻三郎氏を三条市名誉市民に推薦するための協力依頼をされました。

\* 三条RC社会奉仕委員長小出様、西山様から社会奉仕事業講演会とやすらぎコンサートの案内と協力依頼をされました。

1日目 日時 平成14年8月10日(土) 午後2時～

会場 三条市総合福祉センター

2日目 日時 平成14年8月11日(日) 午後1時30～

会場 漢学の里「諸橋記念館(下田村)」

卓 話: 「披露宴の意義と日本人の心」

(有)角屋 餞心亭 おゝ乃ガーデンテラス専務 大野真市様

私たちが日頃何気なに出席している披露宴とはどのようなものなのでしょうか?

今一度、「結婚」の歴史をひもときながら、披露宴というものを深く考えてみましょう。

平安時代は村内婚が主体でした。この村内婚とは、当事者の主体性が尊重され、夜這(よば)いなどの自由な交遊をととして結婚の相手をえらびました。結婚式は簡素で、おもに妻方の女性たちがとりしきり、婿入婚では、夫が妻方の家で妻の親と対面し、親子の契りをむすぶと婚姻が成立しました。通いをつづける場合や、妻方に同居する場合などいくつかのパターンがありました。村の有力者の家では、対等な家柄との縁組をもとめて、村外婚がはやくからおこなわれました。

鎌倉時代には、武家制度普及と共に、村内婚から村外婚へと変化しました。これは当事者中心の結婚から家と家との結婚を意味することで、後に武家社会では家と家の協定のための縁組へと発展しいわゆる「政略結婚」が中心となっていきます。それでは村外婚とはどのようなものでしょう。この村外婚とは、当事者の自主性が弱く、社会の基本を家制度におく武家社会の出現後により一般化しました。それはまた婿入婚から嫁入婚への移行も意味し、結婚にあたっては双方の家をとりむすぶ仲人が出現し、しだいに大きな役割をになうようになりました。近世以降はこの形の結婚がもっとも普及しました。

その後明治時代になると、明治民法では、この家制度にもとづく結婚を踏襲(とうしゅう)し、強大な戸主権(1869年(明治2)明治政府は直轄下の府県に族籍別の戸籍をつくるよう命じ、72年には身分ではなく屋敷番号別に造籍して壬申戸籍(じんしんこせき)ができた。これにより全国的な規模の戸籍制度がひさびさに復活したことになる。壬申戸籍(じんしんこせき)とは、明治政府が1871年(明治4)にだした戸籍法により、翌72年につくったはじめての全国的戸籍である。72年の干支が壬申であるため、のち改製されたものもふくめて壬申戸籍とよばれる。成立後まもない政府が国民を一括して把握することを意図したもので、江戸時代のように身分別の戸別帳ではなく、華族・士族・平民にかかわらずすべての住居に屋敷番号をつけ、そこにすむ戸ごとに登録した。地方は大区・小区にわけられ、各大小区の事務処理の責任者として戸長・副戸長をおき、区ごとにまとめて提出された。住所にあたる屋敷番号につづいて、華族・士族・平民の族籍の別と戸の構成員が記載され、構成員は戸主を筆頭に、戸主との続柄にもとづいて直系尊属・戸主配偶者・直系卑属などの順でしるされた。これらは人の移動や職分構成の把握、徴税・徴兵などをおこなうための基礎資料ともなった。これは現在の戸籍制度の基礎となっている)、親権がさだめられたため、結婚成立にも結婚生活にも一般に親の干渉が強くなりました。また、妻の法的無能力、妾(めかけ)の公



認、妻のみに貞操を要求するなど、極端な女性差別が法制化され、同時に、女性の従順を説く良妻賢母教育もはじまりました。

日中戦争に突入すると、出征前の男性が結婚をいそいだため婚姻率は上昇しました。また、戦死した夫の兄弟と結婚するレビレート婚が増加し、敗戦後は、新しい結婚の形が模索され、平等な男女の自由意志にもとづく結婚という理念がひろまりました。

このようにその時代の必要性に応じながら結婚というものが変化をしてきました。そしてそこにはいつも統治国家を目指す政治の手段の一つとして「結婚」という制度を利用してきたという現実があります。

また豊かになった現在は男女平等の自由意志にもとづく結婚ですが、それは「家と家の結びつき」から「本人と本人の結びつき」への移行を余儀なくされ、両者の考え方が混在しているのではないのでしょうか。（実はこの自由という制度も政治的背景があります。敗戦後GHQの支配下におかれた日本の政治は、それまで戦うことに反対していた勢力が主導権を得ることを意味しております。当然今までの一部の人にだけ与えられていた権力を廃止する為「平等」という名のもとで今までの法律を一新しました。それは結婚制度も例外では在りません。）

ちなみにアメリカでは一般的に結婚すると本人達は親から離れ独立しています。（これは日本が農耕民族で農地（土地）を守るという考え方や国の財力を石高（百万石とかのこくだか）で表したことなどからも伺えるよう代々守り伝えることが大変重要視された国柄と、アメリカは植民地から独立国家になり侵略と略奪によって築かれた国家であるという歴史を考えると当然スタイルは異なっておりましてありまた違って当然であると思います。）

また日本では完全な独立というものは首都圏などではありますが、地方においては独立（別居）と同居が混在しています。また親の気持ちにも、別居における気軽さと、同居における将来の安心と墓を守るという考えが絡み合いなかなか完全な独立というものが存在できないものと思えますし、本人の気持ちでも、金銭面の支援は欲しいが、干渉はいらないなどの気持ちも、親からの独立つまり自立を妨げているものでもあると思えます。

つまり、現代の結婚観は一定の法則がない状態で、どちらかというマスコミによる情報過多からくるファッション性だけが先行しているところが強く、「結婚の大切な意味と意義」を失いつけている時代とも言えますし、披露宴においてはより意味と意義を失いつけている時代と言っても過言でないと思います。

また結婚について二人が一緒になるだけという意味しか見出せない人は、披露宴の本当の重要性（意義と意味）も見出せないでしょうから、披露宴を必要と思わないでしょうし、ひいては「披露宴の加速度的減少」を誘発することにもなります。

今現在披露宴をされる方々に「何故、披露宴を行うのか？」と聞くと、「皆さんが行っているから」「やらないと恥ずかしい」「昔からの風習だから」などと答えられるでしょう。つまりその答えは共通して「やらなければいけないから行う」という考え方であり、本来の意義と意味の説明になっておりませんが、結婚式・披露宴に従事している私たちですら答えようがないのではないのでしょうか？

数年前、仲人様が披露宴には必ずいられました。しかし、今はどうでしょう？

仲人様のいられない披露宴は、今や95％位まで達しそうなほどです。

この仲人様がいられた時代に「仲人は何故必要か？」と質問されたら「仲人というのは、必要です。何故なら今までの風習だから…」とか「皆様おたてになられていますから」としか言えませんでした。

しかし、そう言いつつも、あっという間に仲人はなくなりました。

つまり「風習だから必要」とか「皆様が行われているから必要」という説明しか出来ないものは、必要性を明確に説明できないわけですから、「不必要」をさしている事につながります。（大変困ったことですが、実は全国的に、入籍（結婚）をしても披露宴は挙げないという新婚さんが急増しております）

ですから私達が、披露宴のファッション性だけでなく意義と意味を広く訴えていくことが、披露

宴。罰金を課したり、村から追放することも村八分という場合もありますが、一般的に村八分とは、火災時の消火と葬式への手伝いをのぞいた8種の交際をたつことから村八分と称したという。しかし現在では八分は当て字で、ハブクやハジクの転訛したものと考えられている。私的交際をどこまでたもつかは地域によってことなるが、自給自足が基本の農村で孤立させられることは想像を絶する苦痛であったと想像できます。この制裁は原則として、恒久的な排除ではなく、ある期間をおいてから、仲介人をたてて改悛の意を村人にしめし、寄合の場に酒肴(しゅこう)を提供するなどの手続きをへてゆるされたそうです。

ここで出て来る「火災時の消火と葬式への手伝いをのぞいた8種の交際を断つ」との10種の付き合いとは、冠（元服）・婚（結婚）・葬（葬儀）・祭（法事・年忌）・火事・建築（新築・増築・改築）・出産・水害・病氣・旅行であり、これらは祝儀・香典・お祝い・見舞・餞別などの金品をお渡しするという風習があります。これは10の付き合いの時には、「一時的にも多くのお金を使わなければいけない」ことから、周囲の人が相互扶助の精神でその家の負担を軽減する事を目的とした助け合いの精神でもあります。

※このような風習や考えは世界的に見受けられます

【冠婚葬祭】

成人式・結婚式・葬式および祖先の祭事・法事。人生の節目をなすと同時に、近所（親類）づきあいの根幹となる意で重要視される。

（冠婚葬祭の冠とは、公家（クゲ）・武家が行なった男子の成人式。初めて、おとなの服を着、冠をかぶった。元服の意でもあることから成人式をさす）

もともと披露宴は、ご両家のお祝いごとですから、両家で費用の一切を負担するというのが建前

ですが、せっかくのお祝いごとに、ご両家だけの負担では気の毒だという考えから、お祝いを包んでくるようになりました。これが「ご祝儀」です。

【祝儀とは】

祝いの儀式のこと。また、その際に祝意をあらわす引き出物としておくられる金品をさす。現在では、祝儀袋やぼち袋にいれて謝意やねぎらいをあらわす心付けを意味することが多い。祝儀をだすとか色をつけるなどといい、かつてはこれを被物(かずけもの)、花、纏頭(てんどう)などともいった。

①祝儀から心付けへ…

祝儀は本来は慶事やめでたさを分配して多くの人にいわってもらうことであった。やがて芸人や職人などの労に対して上位の者からあたえられる心付けや謝意を意味するようになった。最近では、ハレの機会だけでなく、日常生活での駄賃や酒手、チップなどもしだいに近い意味になってきている。お年玉も祝儀の一種といえる。

②祝儀と贈答…

祝儀は、不祝儀とされる葬式にくらべると機会が多く、人生の通過儀礼や年中行事にともなうもののほか、新築や屋根葺(ふ)き、農耕儀礼や大漁祝い、開店や初舞台などさまざまな場面でおこなわれる。祝儀や不祝儀に際して金品の贈答することは村落生活の付き合いの基本であり、祝儀帳や香典帳(→ 香典)を作成して義理を欠かさぬことが重要とされていた。贈答に対してはお返しをし、物を介して人と人との関係をきずいて円滑な意思疎通をはかった。しかし、最近の祝儀は、心付けのようにお返しを期待しないものが多くなっている。

つまり、披露宴の大半は祝儀でまかなわれるということです。

それでは実際、幾ら位が祝儀でまかなわれるのかを実例をもとに考えていきましょう。

民間の調査機関であります北越銀行のホクギン経済研究所の電話アンケートによる調査では、祝儀の相場がこのように記されております。また関東圏でも三和銀行が調査していますが、やはり同じ位の金額です。※三和銀行の調査はホームページ「冠婚」を参照のこと